村のチカラ

3 埼玉県宮代町・「新しい村」

稲作代行、栽培体験も

独特のほっつけ田復元

東京都心から電車で一時間ほど。ビル街や住宅地を抜けると、田んぼが目に飛び込んでくる。埼玉県宮代町。東武伊勢崎線の東武動物公園駅から歩いて約十五分のところに「新しい村」がある。

水田や畑、雑木林計約十三㌶が広がる。宅地化されそうだった林地を町が買い上げるなどして確保。二〇〇一年からは運営母体を「有限会社新しい村」として独立させた。

農産物直売所「結」で、野菜の出来を披露し合う農家。中央が「新しい村」の島村孝一代表＝埼玉県宮代町

約二十年前から町が進める「農のあるまちづくり」の象徴的な存在だ。

同社ではパートを含め約四十人が働く。力を入れているのは、農家の高齢化で難しくなった稲作の代行だ。町内の全水田の7％に当たる約二十四㌶の耕作を請け負う。さらに、町内外の人たちに、野菜の栽培をはじめ農業を体験してもらうサービスも提供している。

町を挙げて新しい村を後押ししているのは、「農地の激減は住環境に壊滅的なダメージを与えるから」と榊原一雄町長。社名には「昔からの住民も、首都圏のベッドタウン化した後に移り住んだ人も、農家も商業者も消費者もみんな一緒に、農という地域資源を媒介にして、新しいコミュニティーをつくりたい」（榊原町長）との思いを込めている。

宮代町は高度経済成長期も開発を抑制し、大学を誘致するなど教育に力を入れてきた。バブル経済期、農地開発の圧力が強まったが、一九九三年に就任した榊原町長は「農のあるまちづくり」を本格化させた。現在もコメ作りを施策の柱の一つにしている自治体は、首都圏では珍しい。

新しい村には、農産物の直売所がある。村社会の互助関係を指す「結（ゆい）」と名付けられた。同社が受託耕作したコメを町のブランド米として販売。町内の農家約百人も野菜などを持ち込む。

売れ行きを随時メールで農家に報告するシステムを採用し、新鮮な作物を効率的に補充できる。「町で最も行列のできる店」ともいわれ、ここだけで年に一千万円を売り上げる農家もある。

五月、新しい村の「ほっつけ田」で、四季折々に農業体験を続ける人たちが田植えをした。ほっつけ田とは江戸時代、沼を掘り土を周囲に盛ることでかさ上げした、この地域独特の水田だ。

整備に手間が掛かるため、大半がなくなっていたが、新しい村の事業の一環として復元した。ほっつけ田での田植え体験を希望する人も増えているという。

堀に挟まれたほっつけ田には、青々としたイネが育つ。「先人が苦労してつくり上げた遺産が、まちづくりに生かされる。農家も消費者も、この町で暮らす誇りを得られた」。元宮代町収入役で、新しい村代表の島村孝一さんは、手応えを感じている。

「新しい村」に復元した「ほっつけ田」で田植え体験をする人たち＝埼玉県宮代町